

コロナ禍で気付いたこと



二〇一九年十二月に発見された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、瞬く間に世界に広がりました。世界中で数多くの方が感染し、たくさんの方が亡くなりました。

日本でも、人々の生活が大きく変わりました。人と人との接触が制限され、今まで普通に行ってきたことができなくなってしまうしました。次に書かれている二名の中学生も、それぞれの状況の中で悩んでいます。

カナコの場合

「ただいま。」

中学校一年生のカナコはバスケットボール部の練習を終え帰宅すると、元気よく玄関を開けた。カバンを下ろすとすぐにリビングにいた父に学校で起こったことを報告した。父は大好きな緑茶を飲みながら、うれしそうにカナコの話に耳を傾けていた。カナコは父と仲がよく、授業や部活のこと、友だちのこと等、何でも話せる間柄であった。特に部活の話は盛り上がった。父も学生時代にバスケットボールをしていたので、プレーに関する質問に何でも答えてくれたからだ。

夕食前、カナコと父はいろいろなことを話題におしゃべりしていた。するとテレビから、飲食店で会食をした際に、新型コロナウイルス感染症に集団感染したとみられるニュースが流れてきた。客がマスクをつけずに会話したり、店員が接客したりした場合に感染したケースが多いというものだった。また、路上で飲酒する人たちが後を絶たず、問題となっているということだった。

父は食堂の経営をしていて、普段はとても忙しい。朝早くから仕込みに取りかかり、閉店後もキッチンのもうじや売り上げの確認など、いろいろな仕事に追われていた。父が経営する食堂は近所から人気があり、常連さんも多く、いつもにぎわっていた。

ところが最近、時短営業の要請に応じて営業せざるをえなかった。そんな状況下でも、父はアクリルパーテーションや空気清浄機を購入して、お客様に安心してもらうという工夫していた。自治体の要請に応じ、さまざまな努力をしながらがんばっている父のことをカナコは誇りに思っていた。しかし、数週間後、残念ながら父は食堂を休業する決断を下した。



「ああ、また緊急事態宣言が延長されたか。もう、耐えられないな。」
父のひとり言が聞こえてきた。

一時休業している父はさみしそうで、その顔を見るのはつらかった。父はカナコに気付くと、力ない声でこう言った。



「お客さんによっては、うちの店が貴重な居場所になっている人もいたんだ。上京して一人暮らしをしている人の中には、うちの店に来るのがとても楽しみだって言ってくれる人もいるんだ。父さんだってそうさ。お客さんの笑顔に、どれだけ救われていたか……。」
カナコは、肩を落として落ち込む父の姿を見て、自分はどうしたらよいか悩んでいた。父のためには、お店を早く開けられるようになってほしい。一方、お酒を出す店でクラスターが発生したというニュースも聞こえてくる。
このような状況の中、中学生の自分に何ができるのか、コロナ禍で大切なことは何かカナコはしばらく考えていた。

ケンタの場合

中学校二年生のケンタは地域のサッカークラブに所属している。あと一ヶ月後には、先輩の最後の大会が控えており、練習は激しさを増していた。尊敬するダイスケ先輩とフォワードを担当し、日々一緒に練習していた。

「もっと動きを速くしないと、点は取れないぞ！」

普段は優しいダイスケ先輩も、最後の大会を前に練習に熱が入る。昨年度の先輩たちは県大会でベスト8だった。ダイスケ先輩たちは県大会を突破し、全国大会を目指している。昨年の秋の大会ではベスト4だった。今回は必ず優勝するとチームで誓い合っていた。

「今度の大会は優勝できますよね。先輩方の調子もいいし、今までで一番良いチームだってコーチも言っていたし。」
ケンタがダイスケ先輩に話しかけると、

「秋の大会では、勝てる相手に負けてしまったしな。今回は絶対に勝ってやるぞ！」
と、ダイスケ先輩は意気込んでいた。

練習の途中で、コーチが笛を吹いた。集合の合図だ。

チームのみんながベンチに集まる。コーチの顔が心なしか暗いように感じた。

「みんな、練習の途中にすまん。大事な連絡があるんだ……。」

そう言ったとき、しばらくコーチは黙ってしまった。チームのみんなはコーチを見つめていた。

「本当につらいんだが、今年の大会は開催されないことになった。」
チームのみんなは、一瞬、何のことかよく分からないといった表情だった。

「コーチ、どういうことですか！」
ダイスケ先輩がコーチに迫る。

「新型コロナウイルスの感染がとまらない。大会を開催すると、感染の可能性が高まってしまふんだ。今度の大会は出場チームが多いし、観客もたくさんくる。感染を拡大させないためには中止せざるをえない。私も納得していないが……。」

コーチは、本当に悲しい顔で言った。それ以上の言葉が見つからずに顔を伏せた。

三年生の反応は様々だった。コーチに詰め寄る人、啞然とする人、後ろを向いて泣いている人もいた。ダイスケ先輩は、ベンチ裏へ歩いていった。

ケントはダイスケ先輩を追いかけた。ダイスケ先輩は一人、涙を流しているようだった。

「ケントたちの代は、必ず全国大会に行けよ。」

後ろを向いたまま、ダイスケ先輩はそう言った。

ケントは、何も言えなかった。ダイスケ先輩は、こう続けた。

「先輩たちの悔しい思いを受け継いで、みんなを全国大会に連れて行くのが俺の役割だと思っていたんだ。責任が果たせなかった……。」

それきり、ダイスケ先輩は、何も言わなかった。ケントの頭の中ではダイスケ先輩の言葉がくり返されていた。

大会がなくなったのは確かに悔しい。でも、サッカーは体と体がぶつかるスポーツだから、感染する可能性も考えられる。チームの仲間が新型コロナウイルスに感染したらと思うと、不安な気持ちになってしまう。

チームのため、先輩のため、ケントは自分に何ができるか考え始めていた。

カナコやケントは、それぞれの立場で、どのようなことを考えているでしょうか。

新型コロナウイルスのまん延によって、人々の生活は大きく変わりました。しかし、コロナ禍で生活することによって多くの人が、社会で生活する上で大切なことに気付きました。一人一人が自覚をもち、自分にできる役割を果たそうとしています。これから社会に出ていくみなさんは、どんな考えを大切にしていきたいですか。



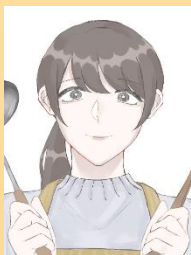
社会の人々は、それぞれの立場で、 どんな思いをもってコロナ禍を過ごしていたでしょうか。

40代 主婦

子どもの休校や夫のテレワークで家族みんなが家にいます。

一緒にいる時間が増えたことは嬉しいけれど、食事の準備や後片付け等、家事がたくさん増えました。

多くのお店が休業要請のため、売り上げが減って困っているとのこと。新たにテイクアウトを始めるお店があれば、積極的に利用するようにしています。魚屋さんでは、飲食店に卸す魚が余っているとSNSに書いてあったので買いに行きました。買い物をすることで、少しでもみなさんの助けになればと思っています。



10代 大学生

授業がオンラインで、大学に行く機会はほとんどありません。

上京し、友達がいない中で一人暮らしは寂しいです。また、家賃も学費も両親に出してもらうのは気が引けるので、アルバイトをして少しでも稼げればと思いました。しかし、コロナの影響でアルバイト先も見つからず、食費を切り詰めて生活しています。

このような状況で、学校に通って学べることのありがたさを痛感しています。自分ができることは少ないけれど、せめて感染しないようにすることが、みんなのためになるかと思っています。



60代 ボランティア

コロナの前は近所のお友達と地域を清掃したり、施設を訪問したりしていました。

コロナが流行してから、いろいろな活動ができなくなって寂しいです。それに加え、お友達の中に、家に閉じこもってしまう人がいてとても心配です。

私にできることは少ないですが、数日おきに声を掛けたり、多く作った料理をお裾分けしに行ったりしています。コロナ禍とはいえ、お友達との交流は続けていきたいものです。



50代 会社役員

職場の在宅勤務を推進し、なるべく出社しないで仕事ができるように調整しています。

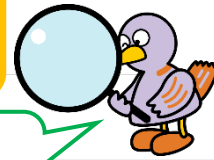
気を遣っているのは、新入社員に対してです。出社することが少ないので、仕事の進め方等、細かく声をかけるようにしています。オンライン会議も少しずつ定着してきました。感染者数を少なくするためには、オンラインは欠かせません。

在宅勤務を効果的に利用して、社員が効率よく仕事できるようこれからも工夫していきます。

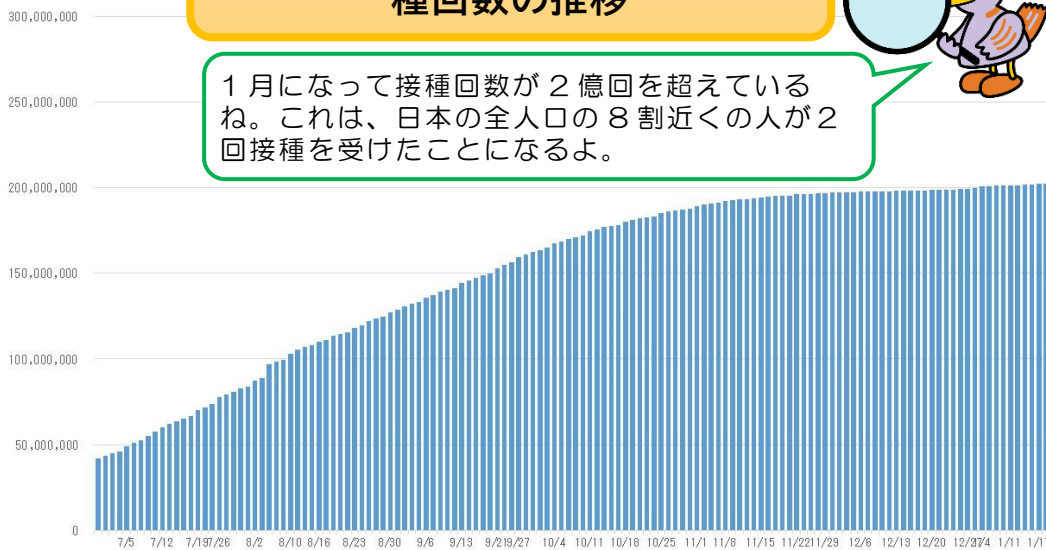


次のグラフやニュース記事を見てください。みなさんはどんなことに気が付きましたか？

新型コロナウイルスワクチンの接種回数の推移



1月になって接種回数が2億回を超えているね。これは、日本の全人口の8割近くの人が2回接種を受けたことになるよ。



(※) 各公表日における総接種回数。なお、接種実績を公表していない土日祝日については掲載していない。

(※) 職域接種については、8月4日以降、ワクチン接種円滑化システム(V-SYS)への報告を使用。

首相官邸ホームページ (<https://www.kantei.go.jp/>) から

海外から見た日本のコロナ対応

「日本人は「気温四十度でもマスク徹底」

カナダレポーターが見た「真面目な姿」に感心」

日本の「マスク着用率」に注目したのは、CBCでレポーターを務めるジェイミー・ストラシン氏だった。「もしもマスクが新型コロナウイルスのユニホームであるならば、日本人はAチーム」の見出しで記事を掲載。こうつぶっている。

「この終わりのないように感じるパンデミック下で、マスクは国際的なユニホームになっている。カナダを含む世界の多くの地域で、マスクは歓迎されてこなかった。ルールがどうであれ、科学が何と言おうとマスクをしない反マスク主義者がそれぞれの地域にはいる。より一般的なのは形だけ従うもので、マスクをあごにつけたり、鼻まで覆わない」

母国の状況を説明した上で「しかし、東京は違う」と強調。日本で見た様子をこうレポートした。

「ここでは、マスク順守はあらゆるところで見られる。来日してから見てきた数多くの人々の中で、マスクをつけていない人は一人もいなかった。一人も、だ。そしてそれは屋内だけではなく、気温四十度の屋外でさえマスク着用は徹底されている」

実際は日本でも全員が着用しているわけではないかもしれない。だが、同氏が見た限りでは強調するほど少なかったようだ。「マスクの適切な着用法を示すポスターから出てきたように、人々は正しくマスクを着用している」と表現。「ワクチンの接種率は低いかもかもしれない」とつづり、「しかし、日本は新型コロナウイルスとの戦いを続けている。人々に正しくマスクをつけることを説得することは課題ではない」と説明している。

(二〇二一年七月二十二日「THE ANSWER」から)